

校歌について

本校の校歌は、創立10周年にあたる明治45年（1912年）に制定されました。作詞は、帝国大学文科大学哲学科（現在の東京大学文学部哲学研究室）出身で、明治43年に本校に着任された藤原正先生によるものです。この藤原先生については「八十年史」「百年史」に、当時の在校生による次のような文章が掲載されています。

「（前略）藤原先生は瘦身白哲の見るから学究的な反面、身を持するに極めて謹厳で我々は大いに畏敬した。着任早々、英語の科目を担当せられ、殊に英文法の蘊蓄が深く、学習にはいささかも斟酌されなかった。（中略）先生の専攻は哲学だったので、我々は更に修身を受け持たれた。倫理の道を教えられるかたわら、大いに談論風発、文学の話に及ばれたことは屢々だった。時にゲーテを論じ、ニィチェを説かれたのはその頃だった。今にして思えばまことに得難い幸福だったとしみじみ感謝せずには居られない。（後略）」

「千古の理想」「思想の泉」等の一節は、哲学を専攻された藤原先生だからこそ生まれたもののよう感じます。

この校歌のメロディは、かつて藤原先生が在籍した旧制第一高等学校（現在の東京大学教養学部前期課程）の寮歌「緑もぞ濃き柏葉の」（作曲：楠正一）のメロディ（元の曲はもっとゆっくりしたテンポだそうです）をほぼそのまま借用したものです。オリジナルの曲を作らずにメロディを借用した理由についてははっきりしたことはわかりませんが、当時音楽の教員がまだいない状況の中、藤原先生が自ら歌唱指導にあたられ、このとき制定された最初の校旗（現在は職員玄関に掲示）とともに創立10周年を飾るものとなりました。

この校歌については、約30年間にわたって、二番の歌詞の一部が誤った状態で歌われていた、というエピソードがあります。

（正）「思想の泉 いや遠く」 （誤）「理想の泉 いや遠く」

明治45年7月20日に創立10周年記念号として発刊された「白玲瓏」第6号には「思想の泉」と記載されていましたが、大正3年4月に発刊された「白玲瓏」第7号には「理想の泉」と記載されていたそうです。その次に「白玲瓏」に校歌が登場するのは大正12年発刊の創立20周年記念号ですが、そこでも「理想の泉」と記載されており、この時期すでに「理想の泉」と歌い継がれていたようです。昭和17年に着任した本校第26期生の教員が、当時同窓会の資料から欠落していた「白玲瓏」第6号を亡兄の遺品の中から発見し、自分が歌っていた「理想の泉」が元々の歌詞と異なることに気付きました。これがきっかけとなり、昭和18年4月に全校生徒に対して、「『理想の泉』は誤りなので、今後は『思想の泉』と歌うように」と指導がなされ、現在に至ります。「八十年史」では、第6号の責任編集者が作詞者の藤原先生であったことと、第7号は藤原先生が他校に異動された後に発刊されていることから、単純に原稿ミスによるものであろう、と結論づけています。昭和53年にこの件について校史編集委員会により改めて調査がなされ、「校歌は、校誌『白玲瓏』第6号に掲載されたものを原典として尊重し、用字、仮名遣いなど全てそのままこれをうけつぎ、今後生徒手帳その他印刷物に校歌を掲載するときは、誤り伝えられることのないよう厳密を期する。」とされています。

（文責：校長 熊澤耕生）